

戦国期加久見氏の勢力下における港の特色—三崎を中心に—

山崎 徹

1、はじめに

土佐一条氏の外戚である加久見氏について、近年では、加久見氏の本拠地（土佐清水市加久見）の発掘調査や、清水港の港支配の観点、また宗教的側面から研究が行われている¹⁾。一方、清水港以外の港についての検討はあまり行われていない。本稿では、戦国末期の土地支配の状況が記録された『長宗我部地検帳』を主に用いて三崎（土佐清水市三崎）の港の特色や加久見氏と信仰との関わりについて若干の考察をしてみたい。

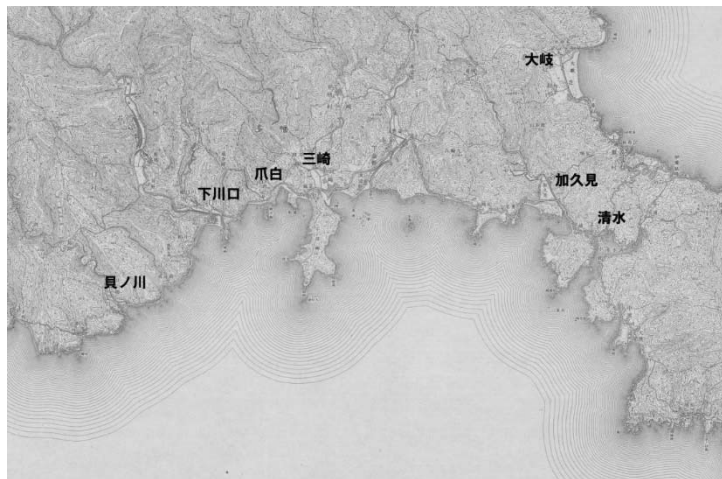


図1 本稿に登場する土佐清水の港位置図
(5万分の1「土佐清水」(昭和8年)より作成)

2、文献史料にみる加久見氏の動向と清水港

加久見氏は現在の土佐清水市加久見に拠点を持つ在地領主である。初見史料を『大乘院寺社雑事記』(文明元年五月十五日条)からみてみたい。

- 一、自幡多被仰出候昇進事、去年十二月卅日任日也
右近将監惟宗朝臣能基 任山城守
豊後介藤原朝臣能永 任雅樂助
左衛門尉藤原朝臣宗孝 任土佐守

このころ、一条教房は幡多へ下向し、権力基盤を築くため有力在地領主に官位斡旋を行っている。官位を用いることで従属関係を示すものと考えられる。その後、文明6年(1474)には「自勸修寺三位方申、加久見入道之孫土佐守息女、為三位猶子分御官仕ニ令進上自去年事也云々」と宗孝の娘が勸修寺三位の猶子となって中村館において官仕えが去年より始まったとある²⁾。一方で「土佐国前殿奉公女房香具ミ入道之孫也、為顕郷猶子仍号中納言局、香具ミ入道は先月廿四日入滅了云々、国人及合戦子細有之歟(後略)」とあり、宗孝の娘が中納言局と名乗ったことが記されている中で、加久見入道が合戦によって討ち死していることが記されている³⁾。その後、中納言局は教房の後妻となる。その後、一条教房と宗孝の娘・中納言局との間に男子(房家)が誕生する。こうして、加久見氏是一条氏と縁戚となり深い結びつきを得る。

文明16年(1484)には「一、就土州若君事、自中納言局文到来、自家門又巨細被仰出、若君去年冬自中村御所足スリへ御入、当年三月ニ清水へ入御南海之津也云々(後略)」とあ

り、若君（房家）が中村から足摺（金剛福寺）に滞在した後、清水に入ったとある⁴⁾。房家にとって加久見氏は大きな存在であっただろう。

このころの清水港の状況を示す史料⁵⁾をみたい。

勸進沙門某敬白

殊に十万檀那の御助成を蒙り上州幡多郡以南村の蓮光寺を建立せむと請勸進状

右當寺の阿弥陀如来の草創はいつれの時と詳ならず、奇特ハさらに今も絶えざる者也、海にのそみて往来の商客を利益し風をわけて南北の舟人を送迎す

（中略）

諸壇も一紙半銭の布施を致さは不尽の樂をあたゆし、建立早く成就せは助縁長く繁栄し現世の安樂のミにあらず、後生の福智さらに疑へからず、勸進の起かくのことし敬白

文明十二年三月十五日

この史料は清水の蓮光寺に伝来した文書である。その中で、「往来の商客を利益し風をわけて南北の舟人を送迎す」とある。清水が交易の港として繁栄していたことが伺える史料といえよう。

このように、加久見氏是一条氏の縁戚の地位を確立し、房家が清水に入津することで、一条氏は加久見氏を用いる形で清水港を支配していった。

3、『長宗我部地検帳』からみた三崎

三崎村は現在の土佐清水市三崎にあたる。三崎川が集落の中央部に流れ、竜串方面の海に注がれる。しかし、国土地理院土地条件図をみると、旧河道は三崎港に注がれていたことになる。

ここで『地検帳』⁶⁾をひも解いてみる。加久見左衛門大夫の給地が多くみられ、戦国期における加久見氏の当主であると考えられる。また、脇書に「カクミ分」「本カクミ分」とあり、「～分」は前所有者の姓を付けた没収地とみられていることから、一条氏時代においてはさらに給地が多かったことが想像できよう。加久見氏以外の給地者には、家臣の中野藤兵衛や下萱（同市下ノ加江）の船頭六郎左衛門の給地がみられる。さらに清水の漁夫、新兵衛の給地があり、これら清水、下萱は港として存在し、海のネットワークによって給地が与えられたものと推察する。

次に、城の存在に注目して『地検帳』の記載をみてみたい。

興ノ城 出五代 同（三崎ノ村） 弁介作

一ノ壺反五代 下々 内廿代川成 賀久見左衛門大夫給

興ノ城中ニクロアリ 出四十代式歩 三崎ノ村 □□□村

一ノ五段三十代 下 賀久見左衛門大夫給

興ノ城とは三崎城のことを指すと考えられる。城主は加久見左衛門大夫であることが給地者から読み取れよう。

また、三崎の特色として塩があげられる。『地検帳』に塩浜帳として塩浜が多く記載され

ている。このことから塩の生産地であったことがいえよう。その中に「賀久見分」とある。加久見氏直轄下で生産が行われ三崎の塩は中村や清水へ運ばれていったと考えられる。

4、加久見氏と地域信仰の関わり

加久見氏は地域の信仰にも深い痕跡を残している。「南海之津」清水には、現在でも信仰を集めている蓮光寺と鹿島神社がある。どれも海に従事する者たちからの信仰が厚く、特に蓮光寺には天文3年（1534）発給の加久見氏の文書⁷⁾が伝来していた。

勸進沙門敬白

請特欲蒙南膽部州大日本土州幡多庄以南村志水於蓮光寺為鑄鐘勸進十万檀那道俗男女助成合力勸進帳

厥以蓮光寺之佛殿者三間四面之堂舎御本尊弥陀之立像行基作也

（中略）

于時天文三年甲午八月時正 敬白

賀久見

土佐守宗孝（花押）

善快（花押）

以南左衛門尉

宗勝（花押）

加久見左衛門尉

宗頼（花押）

ここでいう加久見宗孝は、『大乘院寺社雑事記』に登場する宗孝と同一人物とは考えにくい。当主が代々世襲していったと考えてよからう。

また、鹿島神社は東国（常陸）の神社である。加久見氏との関係はみられないが、神社を媒介として海に従事する者たちを掌握していったと推察したい。次に三崎の香仏寺をみてみたい。文化12年（1815）の『南路志』によると正福寺と号していたという。『地検帳』でも正福寺が確認でき加久見左衛門大夫の給地として記載されている。境内には加久見氏の墓が現存する。「夢庵貞大禅定門文禄二年癸巳天九月十日高麗陣望帰朝於釜山浦岐島而死俗名加久見左近太夫」と刻まれ、文禄の役の最中に亡くなっている⁸⁾。香仏寺は少し小高い場所にあり、そこからは三崎川と三崎港がみえる。海が望める場所に菩提寺を建立することは、加久見氏が海に強い関心を持っていたことが伺えよう。

また、三崎から西にある爪白地区については東近氏の研究がある⁹⁾。『南路志』には「蔵王権現 棟札 永正二年鎮守立申、願主加久見殿之女子東一」とあり、爪白にもある一定の



香仏寺にある加久見氏の墓

影響力があったと考えられる。

5、おわりに

以上、小論ながら三崎や周辺地域について検討を行った。加久見氏は一条氏と縁戚関係となった文明年間には、清水港は交易の港として栄えていた。一方、戦国末期の三崎においては、城を拠点に加久見氏は三崎を支配し、特色として塩の生産が可能であったことである。これらを加久見氏が掌握し、三崎から船で清水や中村に運んだものと推測した。地域信仰との関わりでは、寺社の位置関係や史料から海との繋がりを強く意識していたと考えられる。

今後は、これら三崎を含めた幡多郡南西部の港を一条氏や長宗我部氏がどのように支配したのか、また海に従事する職掌を含めた海浜集落の復原についても考察を深めていきたい。



香仏寺からみた三崎地区

【註】

- 1) 市村高男 2010「海運・流通から見た土佐一条氏」『中世土佐の世界と一条氏』高志書院、東近伸 2014『中世土佐幡多荘の寺院と地域社会』リーブル出版、山崎徹 2021「土佐一条氏の港津支配」『土佐史談』278号など。
- 2) 『大乘院寺社雑事記』文明六年九月十八日条
- 3) 『大乘院寺社雑事記』文明七年七月十三日条
- 4) 『大乘院寺社雑事記』文明十六年七月廿四日条
- 5) 「土佐国古文叢」476
- 6) 「土佐国幡多郡三崎村地検帳」
- 7) 「土佐国古文叢」587
- 8) 「土佐国古文叢」1041
- 9) 東近伸 2014「中世爪白の仏教文化と東小路氏」『中世土佐幡多荘の寺院と地域社会』リーブル出版